

かささぎ 通信 第72号

2018年 10月 12日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一八年九月の「森三郎の作品を読む会」では

『森三郎童話選集かささぎ物語』（1995年、刈谷市教育委員会所収の「かささぎ物語」（『赤い鳥』昭和6年12月号初出）、「竹馬与市」（『赤い鳥』昭和7年4月号初出））を読みました。

「森三郎の作品を読む会」の第一回の集まりは、二〇一二年七月に「かささぎ物語」をテキストとして始まりました（「森三郎の作品を読む会」通信 第1号参照）。当時、この「かささぎ物語」を森三郎童話紙芝居にするという企画があったからです。話の舞台は「三河の高浜」であり、貧しい青年の「真壁」が、妻の「かささぎ」が織った布を「刈谷村」の長者に売りに行くという地域性のある作品です。

この話は『森三郎童話選集かささぎ物語』の解説で酒井晶代氏が指摘されているように、「星女房」「鶴女房」の要素から構成されています。「真壁」は長者が買い取ってくれたお金で、亡き両親のお墓を立派に立て、鹿鷲長者と言われる裕福な身分になります。その後、二人の間に子供が欲しいという「真壁」の望みを叶えるため、「かささぎ」は布を織り続けます。その様子を見ないでといわれていたにもかかわらず、「真壁」はそつとのでいて、「かささぎ」が実はかささぎで、我が身の羽を抜いて布を織っている姿を見つてしまいます。「真壁」が天の星から下された子どもであることを打ち明け、「かささぎ」は空に戻ってしまいます。

その後、森三郎の童話「赤穴宗右衛門兄弟」や「鐘」などは、ラフカディオ・ハーン作品を子ども向けに再話したものであることを知り、次いでこの「かささぎ物語」もハーンのSOME CHINESE GHOSTS（『中国怪異談』）の中の「The Legend of Tchi-Niu」（『織女の伝説』）を元に書いたものであることが見えてきました（本国会誌『かささぎ』第3号「森三郎童話の原典・話材を探る」参照）。

「The Legend of Tchi-Niu」にはハーン自身の解題があり、この話は、老子の聖典の注釈書から採った伝説であることが書かれています。漢の董永という貧しい男が、父を失った後、葬式の費用と墓を立てる金を稼ぐために、身を売ったが、天帝がこれを憐れに思い、女神織女を遣わします。そして毎日絹布を織って彼を自由の身にし、子どもを遣し、空に帰って行くという短い話が元になっているのです。

この短い話は干宝著『搜神記』（東洋文庫、竹田晃 訳）には「董永とその妻」という題で載っていますし、『御伽草子』の中にも「二十四孝」の一人として「董永」が載っています。

三郎の「かささぎ物語」は、ハーンの話のヒントにしながら、高浜の古老たちが伝える話という独自の構成になっています。森銑三・三郎兄弟は高浜出身の父から幼いころに、高浜に伝わる、「二人棕助」（アンデルセンの「小クラウス・大クラウス」）と同じ話を聞かせてもらったことがあるそうです。そういう子ども時代の経験が物語の構成に使ったのではないのでしょうか。読むたびに新しい発見があり、話が深まります。

さてもう一作の「竹馬与市」は、「三河の依網（よさみ）」が舞台になっている点、冒頭の導入歌が物語の内容を暗示している点は、「かささぎ物語」とよく似ています。男の子がほしいと願った老夫婦の元に、お月さまの孫の、身の丈三寸ほどのかわいい「竹馬与市」という男の子がやってきました。「竹馬与市」という名前は、『子守と子守歌』（右田伊佐雄 東方出版）などで、その名のルーツについても分ってきました（「かささぎ通信」第29号参照）。与市は気に入らないことがあるとおじいさんやおばあさんを竹馬でたたいたりします。この点についてはやや腑に落ちませんが、浜ぞいの村の「依網」と塩田、ちいさ子の話、山姥の靈力、夕日が沈んで西の空が赤いわけ、など、いろいろな切り口でこれからも読み深めていこうと、会員同士話し合っ、会を終えました。

次回「森三郎の作品を読む会」（第二金曜日に刈谷市中央図書館で開催）

二〇一八年十一月九日（金）午後一時半～三時半

「虎」「ちえの小法師」「おばあさんと鬼」（『森三郎童話選集かささぎ物語』）